大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

カルネアデスの懐疑主義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 義久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004582

カルネアデスの懐疑主義

山口義久

序、古代懐疑主義とカルネアデス

プラトンが創設したアカデメイアで活躍したカルネアデス（前二一四－一二九）は、懐疑主義者として扱われる一方で、蓋然主義者（Probabilist）というレッテルを貼られて「純粋な」懐疑主義者とは区別されることがある。カルネアデス自身著作を書かなかったし、弟子のクレイトマコスの書物も失われたので、残された史料から彼の実像を再現することは困難である。だがそれでも、カルネアデスの立場に対するさまざまな対応を調べることによって、彼が目ざした哲学とはどのようなものであったのか、そしてその意義はどこにあるのかを考えることは意味のないことではない。

ギリシア最初の本格的な懐疑主義哲学者がピュロンであったことは疑う必要がない位明確である。しかし、ピュロン流の懐疑主義がカルネアデスにどのような影響をあたえたかは明らかでない。アカデメイアでカルネアデス以前に懐疑主義的立場をとったアルケシラオス（前三一五－二四〇）は、ピュロンの弟子のティモンと同世代で、交渉もあったと伝えられているので、ティモンを通じてピュロンの影響を受けたという可能性は想像できるが、[1] けっして自明ではない。アルケシラオスも（カルネアデス同様）著作を残さなかったので、その思想を正確に知ることはできないが、キケロの伝えるところでは、アルケシラオスの立場はピュロンではなくプラトンのソクラテス対話篇に由来している。[2] したがって、カルネアデスがアルケシラオス経由でピュロンの影響を受けたと言うこともできない。

ディオゲネス・ラエルティオスの語るところによると、アルケシラオスはリュケイオンに学んだあとでアカデメイアに移っている。[3] 当時のアカデメイアでは倫理的な問題の研究が主流を占めていたこ

とからすると、アルケシラオスの関心もその方面にあったのではないかと推測できる。だが、どうやら彼は当時のアカデメイアの風潮に満足していなかったようで、彼なりの新しい議論のやり方、すなわち、ソクラテスにならって「自分の意見を出さずに、誰の言った意見にも反論する」やり方を始めたと言われる。[4]

アルケシラオスの反論の対象は、主としてストア派の認識論であった。その内容については、次章で少し見ることになるが、ストア派の側にも彼の議論を意識した形跡が認められる。アルケシラオスが標的にしたのは、彼の時代からして、とくにゼノンの立場であるが、その後クリュシッポスがストア派の立場を固めたのに対して、今度はカルネアデスが反論したと伝えられるのである。[5] したがって、アルケシラオスとカルネアデスの関係は、時代的な隔たりを越えて、ストア派との論争を通じてつながっていると言える。

さらに時代が下って、ピュロンの立場を復興したと称する後期懐疑主義者たちは、詳細な議論が特徴的であるが、その議論の緻密さにはアカデメイアの議論を下敷きにしたものが多く含まれていることは疑いえない。しかし彼らは、自分たちとアカデメイアの立場を意識的に区別しながら、懐疑主義の立場を純粋に保とうとした。[6]

その立場の微妙さについては、以前少し論じる機会があった。[7] 後期懐疑主義の純粋さを評価して、その立場を擁護する議論もさまざまに試みられているが、結局この立場も倫理的な問題から切り離されたところで議論しているわけではないので、生き方と懐疑主義とがどのように関係づけられるかという問題が、理論的な洗練だけによっては簡単に解決できないものとしてついて回る。ここではその問題には踏み込む余裕はないが、カルネアデスらのアカデメイアの立場が後期懐疑主義と区別されるなら、それだけいっそう、独自の見方を提供するものとして意義をもっていると期待できるだろう。

一、アルケシラオスとカルネアデス

カルネアデスの立場とその独自性を知るためには、彼の先駆者であるアルケシラオスとの共通性と相違点を押さえておく必要がある。両者のストア派認識論に対する議論の中心は、ストア派の「把握」概念に向けられたものであった。

ストア派の認識論では、感覚を通じて受け取った表象に是認（同意）をあたえることによって、把握と呼ばれる認識が成立する。この把握が知者において堅固なものになったものが知識・知恵であり、愚者のうちに生じれば思惑（ドクサ）であるが、把握がなければ知者も存在することはできない。そして彼らは、人を把握に導く表象を「把握的表象」として、そうでない表象から区別した。[8] この点がアカデメイアの批判にさらされることになるのである。

アルケシラオスは、把握が知者のうちに生じれば知識であり、愚者のうちに生じれば思惑であって、それ以外の場合は（ストア派の立場からして）ないなら、把握は単なる名前にすぎず、知識や思惑から独立のものとして存在しないと言って「把握」概念を批判し、偽にならない真なる表象は一つも見出されないから、把握的表象は存在しないと論じた。[9] そして何も把握されないなら、同意は無意味になるし、知者が同意をあたえるとすると、知者は思惑することになってしまう（ストア派が認めない帰結）ので、知者は同意を差し控える、すなわち判断保留（エポケー）しなければならなくなる。[10]

ストア派の言う把握的表象が存在しない、すなわち偽なる表象と全く似ていないような真なる表象が存在しないという主張を確立するために、アルケシラオスは精力を傾注したと言われるが、[11] アカデメイアの論点のどれがアルケシラオスのものであるかは、必ずしも明らかではない。

カルネアデスの名前で伝えられる論点が述べられる文脈に、ただアカデメイアの人々の考えとして言及されるものがある場合には、アルケシラオスの論点である可能性がある。たとえば、卵や双生児のように似ているものの場合、把握的表象と偽なる表象との区別は、ストア派の知者であっても、つかないと言われる例がそうである。[12] それに対するストア派の反論は、カルネアデスに対するというよりもアルケシラオスに対する応答と受け取ることができる。[13]

セクストス・エンペイリコスによると、アルケシラオスもまた、生の営みについても考察しなければならず、幸福についての規準を必要としたという。[14] これはストア派の、懐疑主義の立場では行動することができなくなるという反論を、アルケシラオスも考慮せざるをえなかったということであろう。

彼の議論からすると、知者でさえ判断保留をしなければならないのだから、（ストア派の用語を使えば）同意をあたえることなしに行為できると論じる必要があった。しかし、ストア派の行動論から「同意」を抜き去るなら、表象から衝動（刺激から反応）へ直結するという、動物の行動と少しも違わないものになってしまう。[15] アルケシラオスの議論がそこで終わるとしたら、ストア派の立場を無効にするだけでなく、自分たちの議論をも無価値なものにしてしまう結果になるのではないかと危惧されよう。

だが、アルケシラオスはその問題を考慮した。すなわち彼は「理にかなったこと」を規準にして行動するなら「適正な行為」ができると論じたのである。[16] 適正な行為というのは本来ストア派の概念で、知者にしかできないと主張されたものであった。[17] つまり、アルケシラオスは、把握的表象などなくても、理にかなっているか否かを判断できれば、知者として生きられると論じているのだと解釈できる。

しかし、どのような条件を満たせば理にかなっていると言えるのか、残念ながらアルケシラオスの説明を聞くことはできない。

それに比べると、カルネアデスの立場はもっと鮮明であるという印象を受ける。とくに、彼の標的は多作家として知られるクリュシッポスだったために、それを意識して練り上げられた議論も、内容豊富になったのではないかと想像できる材料がある。[18] だが、少なくともストア派の認識論批判に関しては、把握的表象を問題視した点で、基本的にアルケシラオスと同一路線であった。

キケロの証言によると、二人の違いは議論の組み立て方にあった。ストア派が認める命題「知者は同意をあたえる（同意なしに把握はありえないのだから）」と「知者はけっして思惑をいだかない」を両者が用いているが、それぞれ一方を否定するために他方を用いているのだというのである。[19]

アルケシラオスは、知者はけっして思惑をいだかないという方を前提として用い、把握的表象の不在をもう一つの前提として、知者は非把握的表象に同意をあたえることを差し控える、すなわち判断保留すると論じた。それに対してカルネアデスは、知者が同意をあたえるという前提と、把握的表象の不在から、知者が思惑をいだくことがあるという結論を導き出したことがあると言われる。

この違いはいったい何を意味しているのであろうか。アルケシラオスの議論がストア派の知者に判断保留を強いる、つまり懐疑主義者にしてしまう、巧妙な議論であったのに対して、知者が思惑するという（比較的印象度の薄い）結論をもつ、別の議論をつけ加える必要があったのかという疑問が生じるのである。

これは、クリュシッポスの「知者」概念との関連から理解できるかもしれない。ストア派の理想像としての知者は、完全無欠の人間のように描かれている。[20] 少なくとも知の点で完璧であれば、思惑をいだくことは不適切なことである。[21] 自分の先生や自分自身を含めて、知者と呼べる人に一人も会ったことはないと言うクリュシッポスがその見方の極北にあるとすれば、[22] 知者が思惑するという結論を導く議論でも、クリュシッポスにとっては打撃となると思われる。

アルケシラオスの批判に答えるには、知者が同意をあたえない場合もある、すなわち把握されないものには同意しないということを認めればよい。このことによって、疑わしい表象があっても知者が思惑することはないという点を守り通すことができる。したがって、把握的表象と区別できない偽の表象が見出されうると論じただけでは、ストア派の知者を（けっして同意をあたえることがない）懐疑主義者にすることはできない。もっと強い議論が必要になる。

カルネアデスは、把握的表象が存在しないという論点を強化するとともに、他方でアルケシラオスの議論を「思惑する場合がある」

という結論をもつ型に改変することによって、反駁の有効性を高めている。知者が「すべての場合に」思惑すると言えなくても、クリュシッポスに対する批判としては有効だからである。

ストア派は把握的表象が「角の生えた蛇」が他の蛇から区別されるように、固有の特性をもっていると主張したが、[24] カルネアデスの新たな論点は、それを否定するものである。把握的表象の固有の特性として考えられているのは、非把握的表象に否定されている特性、すなわち明晰・判明さであると思われる。[25] しかし、非把握的表象とされる「存在しないものから生じる表象」も、存在するものから生じる表象と同等に明瞭で目をひくものだとカルネアデスは論じる。[26] その証拠として、夢の中で生じる表象も、怖い夢を見て声をあげる場合のように、行動に結びつくと言うのである。

さらに、把握ができる能力として最も有力だと思われる視覚でさえも、何かを把握できるものではないと論じられる。[27] 色がさまざまな条件によって変わるので、それが真実に何であるかは知られないし、形の場合にも難問があるという。塔が丸くも四角にも見えるとか、オールを海に入れると曲がって見えるなど、古典的な例が挙げられているのも注目に値する。

このように、ストア派の認識論に対しては、カルネアデスの仕事は、アルケシラオスと違った方向を目ざすものではなく、同じ線にそって、さらにそれを強化するものであったと見ることができる。また、カルネアデスの新しい論点がストア派の新たな論点に対する対応として出されていることも、基本的には疑いえない。

それでは、ストア派の「行為不可能論」に対してはどうであろうか。アルケシラオスの「理にかなったこと」に対応すると思われる考えとして彼は表象の間の段階的区別による説明をあたえた。この区別が実質的にどのようなものであり、それによってカルネアデスがどのような立場をとっていることになるのかが問題になる。

二、カルネアデスによる表象の区別

表象のうちでも真と現われない表象は、問題にする必要がないと思われるので、カルネアデスが考慮の対象とするのは、説得的な（信憑性のある）表象である。[28] この説得的表象のうちに、ただ説得的なだけのものと、そうでないものとが区別されるのである。

この説明を伝える史料の間には、多少の不一致があるので、彼の真意を探るためには、まずテクスト上の問題を片づけなければならない。中心となる史料はセクストス・エンペイリコスの二つの著作のうちに現われるが、その両者の間にはっきり目につく違いが認められ、一方の著作の内部には小さな不一致が見られる。

訳語の問題については後であらためて論じなければならないが、

暫定的な訳語を用いながら三箇所の区別の仕方を比較してみよう。まず、最も詳細な説明があたえられている『学者先生論駁』（以下『論駁』）第七巻二六七節以下（とくに一八四節）では、(1)（単なる）説得的表象、(2) 説得的で紛らわされない表象、(3) 説得的で紛らわされず精査された表象の、三段階の区別があたえられている。ところが、その前の予告的にこの区別に言及している箇所（一六六節）では、今の(1)と(3)に相当すると思われる表現で、二段階の区別が述べられているように見える。

さらに、『ピュロン哲学の概要』（以下『概要』）第一巻では、(1)（単なる）説得的表象、(2) 説得的で精査された表象、(3) 説得的で精査された、紛らわされない表象という三段階の区別が述べられている。ここでは明らかに、三段階という同数の区別が、順序を一部逆にした基準によってあたえられていることになる。

J・アレンはこの不一致に着目して、セクストスがカルネアデスを誤解した可能性を追求した解釈を提出している。[29] 簡単に言うと、カルネアデスは「説得的表象」という類の三つの種として三段階を区別しているのではなく、段階としては二段階で、あとの二つは、表象を検討する手続きの区別にほかならないというものである。

これは、史料の間の不一致がどうして起こったかを説明する一種の仮説であって、それ自体として興味深い考察も含まれているが、原典解釈としては、そのような仮説が必要かどうかが問題である。同じ著者の二つの箇所に不一致がある場合、必ずしも両者が否定されるわけではなく、一方が正しくてもう一方が間違っている可能性も残されているからである。その可能性について考察してみよう。

まず『論駁』と『概要』との間の不一致であるが、両方の文脈を比べると『論駁』の方の説明の充実が目をひく。それは説明の長さからも言えることだが、内容も整理して語られているのが分かる。たとえば、第二段階の表象についての説明は次のように始まる。

表象がそれだけで単独に成立することはけっしてなく、ちょうど鎖のように、ある表象は別の表象と依存しあっているので、二つ目の規準として、説得的であるとともに紛らわされることのない表象がつけ加わることになる。例えばある人間の表象を受けとる人は必然的に、その人に関するさまざまな事柄の表象も、外的状況の表象も、受けとることになる。その人に関するさまざまな事柄とは、例えば色、大きさ、形、動き、語り、衣装、履物などであり、外的状況とは、空気、光、昼、天、地、友人たち、その他一切のことである。そこで、それらの表象のどれも偽と現われることによって我々を紛らわすことがなく、すべて一致して真と見えるなら、我々はそれらを一層信用する。[30]

これを具体的な例（ソクラテスを見分ける場合）で示したあとで、医者が病気をたった一つの症状から診断せずに、いくつかの症状の同時発生（シュンドロメー＝syndrome）によって診断する例になぞらえて説明している。[31]

そして第三段階の表象についての説明は、第二段階との相違点を明確に示したものである。

紛らわされない表象の場合には、ただ同時発生する表象のどれも偽と紛らわすものがなくて、すべてが真と現われ、説得的でないものがないということだけが求められているのに対して、精査された表象にもとづく同時発生の場合には、同時発生した事象のそれぞれを我々は……注意深く調べて評価する。例えば判断が行なわれる場に、判断するもの、判断されるもの、判断がそれを通じて行なわれる媒介、（すなわち）距離、感覚、場所、時間、あり方、状態、活動といったものがある場合、我々はこれらがそれぞれどのようなものであるかを厳密に識別する——判断するものについては、視力が鈍っていないかどうか（というのは、視力がそのようであれば、判断するには不適切であるから）、判断されるもののことは、余りに小さいものでないかどうか、判断がそれを通じて行なわれるものについては、空気が霞んでいないか、距離は余りに大きすぎないか……時間は短すぎないかどうか……というように。[32]

つまり、第二段階のチェックは、同時発生した表象がどれも説得的（信憑性がある）かどうかであったのに対して、第三段階では表象の成立条件がチェックされるという説明だと理解できる。

それに対して『概要』の説明は、二通りのチェックの区別をそれほど明瞭に示していない。精査された表象の説明は、暗い部屋の中にあるとぐろを巻いた縄の例を通じてあたえられる。[33] 部屋に入って一見したところでは、それは蛇だという単なる説得的表象がえられるが、それが動いていないことや色がどうであるかなどを観察することによって、それは縄だという「説得的で精査された」表象がえられるというのである。これは『論駁』の説明と比較すれば、精査された表象の説明であるよりはむしろ、紛らわされない表象にあたえられた「同時発生」による説明に対応していると見える。

紛らわされない表象については、非日常的な例を通じて説明される。すなわち、死んだアルケスティスをヘラクレスが黄泉の国から連れ戻してアドメトスに見せたという物語が引き合いに出されるのである。アドメトスは、アルケスティスの「説得的で精査された」表象を受けとったにもかかわらず、彼女がすでに死んでいることを知っていたために、その思考は信じない方に向けられたという。[34]

この例は、実は「紛らわされる」表象の例であることに気づく。

同様な説明は『論駁』の中でも同じく非現実的な例を通じてあたえられている。メネラオスはヘレネの幻影を本当のヘレネと思って連れて来ていたが、パロス島に上陸した時に本物のヘレネに会っても「彼女を船に残してきたと彼が知っていることの根拠となっている別の表象に紛らわされたために、その真なる表象を信じなかった」と言われる。[35] セクストスはこちらの箇所では、この話が「紛らわされない表象が、信念を形成することの同時発生である」ことの証拠となると述べている。『概要』の例と比較しても、紛らわされない表象の特徴は、その表象の信憑性を失わせる別の表象が同時発生していないという点で共通していると見ることができる。

ところが『概要』では、精査された表象についても、複数の表象の検討によってその両立を確認するという以上の説明はあたえられていない。したがって『概要』の説明が二つのチェックの仕方の差異を明確に示しているとは、とうてい言いがたい。

ここで「紛らわされない」と訳した言葉（aperispastos）について一言つけ加える必要があろう。これはperispaoという動詞から派生した受動的な意味の形容詞の否定形である。この動詞をクリュシッポスは、信憑性のある事柄との関係で「気をそらす、向け変える」という意味で用いているので、[36] カルネアデスの用語も、それと同じ線で解釈するのが最も自然であろう。「紛らわされない」は、「紛れる」という言葉に「判然としなくなる」という意味と「気がそらされる」という意味が含まれることから試みに訳語としたものだが、少なくとも、複数の表象の間で紛れることなく、信頼がそらされないという、この文脈には合っていると思われる。

『論駁』の説明と『概要』の説明とを比べた結果からは、両者の証言としての価値が同等であるとはとうてい思えない。どちらかを採らなければならないとすれば、当然『論駁』の方になろう。

だがそれでは、どうして『概要』では不完全な解説しかあたえられないのであろうか。もちろん確実な答を出すことはできないが、文脈を考慮すれば一応の答を出すことはできる。すなわち『概要』でカルネアデスの問題の考えが紹介される文脈は、ピュロンの立場を復興したと考える後期懐疑主義を、他の立場から区別するという意図から論じられている箇所であって、[37] カルネアデスの立場を自分たちの立場から区別できる以上の正確さには、セクストスは頓着していなかったのだと考えられる。おそらく『論駁』の場合のように三段階の区別をカルネアデスが述べたということまでは彼の意識にあっても、その区別を正確に述べる努力が必要だとは考えなかったことが、この箇所の混乱の原因であったのではないか。

それでは『論駁』の説明同士の間にある不一致はどうだろうか。一六六節では、二段階の区別が語られていたのである。だが、この

点は、その後の説明が明瞭なものである限り、単に簡単に省略的に語っただけのことだと解釈できよう。一六七節以後の三段階区別を疑問に付すような材料は、とくにそこにはないのである。

三、カルネアデスは「蓋然論者」だったか

これまで見てきたように、セクストスの『論駁』第七巻の記述が信頼できるならば、カルネアデスが提出した議論はひじょうに洗練されたものだったと言うことができる。しかし、その議論によって何が意図されていたかについては、解釈者の意見は分かれている。伝統的な解釈では、カルネアデスが「信憑性」を自分の考えとして提出していると見なし、彼の立場を後期懐疑主義とははっきりと区別する。[38] これはまた、セクストス・エンペイリコスが『概要』の、さきに見た箇所の文脈で呈示している解釈でもある。それに対して最近の解釈のうちには、カルネアデスがその議論を、自分の立場の表明として提出しているのではないと論じるものが目立っている。[39] 残された紙数を、そのような解釈の線をとることが妥当であるか、あるいはカルネアデスの意義を考える上で、何らかの利点をもっているかどうかを検討することに当てることにしたい。

R・ベットの整理によると、新傾向の解釈は、(1) カルネアデスの議論をストア派を相手にすることだけを目的とした「アド・ホミネム」なものとする解釈と、(2) カルネアデスの議論を別の議論と拮抗させて判断保留の根拠とするという「イソステネイア」（同等の力をもつ議論）解釈の二つである。[40] それらの解釈の妥当性を検討するためには、まずその内容を把握しておかなければならない。

最初に、ベットが伝統的解釈の代表例としている、C・ストウの解釈によると、カルネアデスはいかなる感覚的言明に対しても、限定つきの同意はあたえたが、無条件の同意はあたえなかった。つまり、その言明を支持する根拠が強いほど確信も強くなった。しかし他方で、単なる誤りの可能性があるというだけでは、表象全体の信憑性を疑う根拠として充分だとは考えなかったという。[41]

次に「アド・ホミネム」解釈のうち、比較的単刀直入のタイプとされるものによると、「信憑性」とその段階の説明は、カルネアデスがストア派によって実際生活の規準について問いただされたために述べざるをえなかったものにすぎず、彼が自ら進んで自分の考えとして提出したものではないということになる。[42]

同じ「アド・ホミネム」解釈に分類されるもののうちにも、もう少し微妙な解釈がある。たとえばバーニェトは、カルネアデスはストア派の説明に非常によく対応する説明を出したが、その目的は、把握的表象に対する彼の批判を、真理の規準の不可能性に対する、より一般的な証明とするためだと解釈する。[43] またロング&セドリー

の説明によれば、ストア派の把握的表象をつき崩せば他のあらゆる真理規準も成立しなくなるとカルネアデスは考えたのであり、彼はストア派の「説得的表象」という考えに彼なりの洗練を加えた上で彼らに返上し、そのことによって、「信憑性」があればストア派が主張する到達不可能の確実性がなくても間に合うということを示したのだということになる。[44]

それに対して「イソステネイア」解釈をとるなら、信憑性の議論と拮抗させられる主張が何であったかも説明しなければならない。ストライカーによれば、カルネアデスはアルケシラオスとは違ってストア派を批判するだけでは満足せず、ストア派の提起した問題に対する代案となる解決を提出したが、これはストア派の主張と反対の主張が同等の妥当性をもって主張されうるということを示すためであった。[45]すなわち、カルネアデスの議論対ストア派の議論という対立拮抗が判断保留の根拠となっていると考えるわけである。

セドリーは、信憑性が規準だという議論に拮抗させられるものとして、規準が全く存在しないという議論を提案している。[46]その根拠とされるのは、セクストス『論駁』第七巻で、カルネアデスの説得的表象についての議論が紹介される前に、カルネアデスが真理の規準が存在しないという議論をしたことが語られていることであり、またカルネアデスがローマで最初正義を擁護する議論をし、次の日不正を擁護する議論をして聴衆を驚かせたという話を傍証とする。[47]

このようにさまざまな解釈が出されること自体、どれも決定的な解釈ではないことを示唆していると言えるかもしれない。たとえば最後の、拮抗する議論の一方とする解釈は、カルネアデスの議論の導き方の特徴を表わしているように見えて、それ自体として魅力のある提案に思えるが、カルネアデスがそれを「イソステネイア」の一方として判断保留に導いたという直接的証拠に欠けている。そもそも、カルネアデスが相対立する立場を支持する議論を展開するのは、後期懐疑主義者のように公式的な「イソステネイア」を目ざしたからかどうかが明らかでないのである。

その点を考慮すると、「アド・ホミネム」解釈のうちの後者は、ストライカーの「イソステネイア」解釈と実質的な違いがほとんどないのではないかと思われる。これらの解釈を分類しているベット自身、それら二つとセドリーの「イソステネイア」解釈のうちどれを優先すべきか決めかねているのも当然のことである。

また、「アド・ホミネム」解釈は、カルネアデスの議論の微妙なニュアンスを重視すればするほど、伝統的な解釈との間にそれほど距離がないように見えてくる。たとえばロング&セドリーは、上で見た箇所のすぐあとで、カルネアデスは判断保留を放棄しないが、行為の動機づけに充分な程度の弱い同意を信憑性のある表象にあた

えると言っている。[48] 完全に同意をさし控える懐疑主義の立場と、積極的な主張をたてる（ある考えに無条件の同意をあたえる）立場との中間にカルネアデスを位置づける点で、この解釈と伝統的な解釈は共通しており、違いは強調のおき方にあるだけではないだろうか。

我々が直接カルネアデスに問いただすことは不可能である以上、最終的な決着を求めるためには、残された史料に従うほかはない。しかし、史料の間に不一致が存在することが問題である。キケロはカルネアデスの直弟子のクレイトマコスの証言を、その後のピロンやメトロドロスの証言よりも重んじている。[49] 伝統的な解釈が退けられる理由とされるのは、それが後者による歪められたカルネアデス像にもとづいているという判断である。すなわち、クレイトマコスの伝えるカルネアデスは「何を是認しているのかを知ることができない」人であって、彼が積極的な主張をしたかのように見えるのは後世の独断主義的アカデメイアを経由したカルネアデス像だということである。[50]

しかし、新しい解釈にとって都合の悪い史料は、すべてピロン・メトロドロス経由のものであるとして片づけられるのであろうか。キケロがクレイトマコスにもとづいて語っている文脈でも、カルネアデスが同意をさし控えるだけでなく、信憑性（probabilitas）に従う場合があることが語られている。

だからクレイトマコスは、アカデメイアによって感覚をとり上げられてしまったと言う人々が途方もなく間違っていると言うのです。アカデメイアの人たちはけっして色や味や音が存在しないと言ったことはなく、彼らが論議したのは、それらの感覚の中には真実性と確実性のしるしがそれらに固有のものとして具わってはおらず、それは他のどこにも見出せないということでした。これらの論点を提出したあとで彼は知者が同意をさし控えるということは二通りの意味で語られるとつけ加えます。すなわち、一つには、まったく何にも同意をあたえないということを意味する場合であり、もう一つには、何かを否定も肯定もすることがないように、何かを是認したり否認したりするという仕方で答えることをさし控える場合であるというのです。そのような事情から彼は、前者を採用してけっして同意をあたえないようにするが、後者も保持して信憑性（真らしさ）に従い、それが現われているときはいつも「そうだ」と答え、欠けているときには「否」と答えるようにしたのです。[51]

これによれば、クレイトマコスを典拠にしても、カルネアデスが信憑性に従う場合があったと考えざるをえない。

四、カルネアデスの立場の意義

そうすると、カルネアデスが同意をさし控える二通りのやり方を区別しているのは、どのような区別を意味していることになるか。ここでもう一度セクストスに戻って、『論駁』で「説得的表象」が用いられる仕方の区別を説明する箇所を見てみよう。

このように説明してきたのは、それらすべてが、それぞれ規準となるからである。[三段階の区別が述べられる] その理由によって、ちょうど生活において我々が些細な事柄について糺すときには一つの証拠だけを問題にするが、もっと大きな事柄については複数の証拠を、そして更にもっと重大な事柄については、証拠だてるものをそれぞれ他の証拠と照らして一致するかどうか調べるように、カルネアデス一派の人々が主張するには、それと同様に、我々は、行き当たりばったりの事柄においては説得的表象だけを用いるが、重要性がまさった事柄の場合には紛らわされない表象を、そして幸福が懸かってくる事柄の場合には精査された表象を用いると言うのである。[52]

ここでは、三段階の説得的表象が規準として用いられるのが、幸福や生活が関係してくる文脈であることが明瞭に語られている。そもそも当の議論が紹介された最初の箇所から、彼が「人生を営むための、また幸福を獲得するための、何らかの規準を必要としていたために」段階的な区別を考えたと言われていたのである。[53]

これは、それ以前の箇所で、カルネアデスがいかなる規準も存在しないと論じたと言われるときの文脈と同じとは思われない。そこでは明らかに「真理の規準」が問題にされていたのである。[54] カルネアデスが実質的に「真理の規準」と「生活のための規準」とを区別していたなら、すなわち、純粋に認識論的な文脈では規準の存在を否定し、実際生活のための規準としては段階的に区別される信憑性をもつ表象を採用したのであれば、ここでの問題に、一応の説明がつけられるのではないだろうか。

たとえば、両側の立場にたった議論を展開するのがカルネアデスの常套手段であったとしても、それが真理の規準が存在しないことを示すためのものであれば、それと同時に生活のための規準として何かを採用しても、けっして矛盾とは言えない。また、彼の議論が主としてストア派を反論することを目ざしたものであるとしても、それは、後期懐疑主義者の「下剤」のように、[55] 相手の議論とともに消滅してしまうものではなく、むしろストア派の「行為不可能論」[56] に有効に答えるものとして保持されていると言えよう。

もちろん、後期懐疑主義を正統的な懐疑主義と考える見方をとるなら、カルネアデスの立場を正統的と見なすことはできないだろう。

しかし、彼の立場を右のように見ることができるならば、無理に彼を正統的な懐疑主義者に仕立て上げる必要がどこにあるのか理解できない。懐疑主義の本質がつねに判断保留に導かれるというところにあるとすれば、懐疑主義の哲学的な意義はどこにあるのだろうか。公式化に陥った懐疑主義は、懐疑主義者が「独断主義」と呼ぶ立場よりも（一種のミソロゴスになることによって）もっとたちの悪いものになるのではないかと疑われる。

カルネアデスがアカデメイアの流れを汲む者として、議論の力に信頼を懐き、価値をおいていたことはありそうなことである（それはアルケシラオスについても言える）。アイネシデモスやセクストスといった後期懐疑主義者が実のある議論ができた背景に、アカデメイアの議論の貢献がどれくらいあったかは、確定することが困難であるが、けっして無視することができないことは明らかである。アルケシラオスやカルネアデスの議論は、懐疑主義が一種の哲学であることを可能としたと言えば誇張になるであろうか。

また、懐疑主義的立場と生き方との関係を考えるときには、カルネアデスの立場は一つの独自なパラダイムを提供するものである。独断的な主張を避けながら、実際の行為にあたってできるだけ妥当な判断を得るための着眼点を示しているからである。そして古代の懐疑主義が本来、純粋に認識論的な問題から出発したわけではなく幸福や生き方の問題との関わりから出てきた立場であることを考えると、カルネアデスの議論は懐疑主義の中心的な問題に、逃げることなく立ち向かったものだと評価してもよいであろう。

註

（1）ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（以下DL）四、三三参照。

（2）「アルケシラオスは、プラトンの様々な書物やソクラテス的対話篇から、確実なことは何も、感覚によっても精神によっても知覚することはできないということを、とくに引き出した」（キケロ『弁論家について』三、六七）。DL、四、二八参照。

（3）DL、四、二八。

（4）キケロ『弁論家について』三、六七。

（5）DL、四、六二。

（6）セクストス・エンペイリコス『ピュロン哲学の概要』（以下SEPH）一、二二〇以下参照。

（7）拙稿「懐疑主義のパラドクス」（『人文学論集』第七集三五―五二頁、一九八九年）。

（8）DL、七、四六、セクストス・エンペイリコス『学者先生論

駁』（以下SEAM）七、一五一―一五二など。この区別が、ゼノンに由来することについては、キケロ『アカデミカ』（以下CA）一、四〇参照。

(9) SEAM、七、一五四、CA、一、四五。

(10) CA、二、五九、SEAM、七、一五六。

(11) CA、二、七八。

(12) SEAM、七、四〇九。

(13) CA、二、八五。

(14) SEAM、七、一五八。

(15) プルタルコス『コロテス論駁』一一二二C参照。

(16) SEAM、七、一五八。

(17) キケロ『善悪の極致について』三、五八―九、ストバイオス『集成』（以下ST）二、八五、一三。SEAM、十一、二〇〇―二〇一。

(18) DL、四、六二。

(19) CA、二、六七。

(20) DL、七、一一七―一二五。ST、二、六五、一二。

(21) SEAM、七、一五二。ST、二、六五、一二。

(22) プルタルコス『ストア派の自己論駁』一〇四八E。

(23) ST、二、一一一、一八。

(24) SEAM、七、二五二。

(25) DL、七、四六。

(26) SEAM、七、四〇二―四〇五。

(27) 同、七、四一一―四一四。

(28) 同、七、一六九―一七三。

(29) J. Allen, 'Academic Probabilism and Stoic Epistemology', *Classical Quarterly* 44, pp.85-113, 1994.

(30) SEAM、七、一七六―一七七。

(31) 同、七、一七九。

(32) 同、七、一八二―一八三。

(33) SEPH、一、二二七―二二八。

(34) 同、一、二二八。

(35) SEAM、七、一八〇。

(36) プルタルコス『ストア派の自己論駁』一〇三六C。

(37) 註（6）参照。

(38) E. Zeller, *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtliche Entwicklung*, Bd.III, 1, S.507

(39) 以下の解釈の分類は、R. Bett, 'Carneades' Pithanon: A Reappraisal of its Role and Status', *Oxford Studies in Greek Philosophy*, Vol.VII, pp.59-94 (1989) に

(この分類が唯一可能なものではないが、議論の都合上) 依拠する。

(40) R.Bett, ibid. pp.78 sqq. 'isostheneia' については、SEPH、一、八—一〇参照。

(41) C.L. Stough, *Greek Skepticism*, p.58; cf.Idem,'Knowledge and Belief',*Oxford Studies in Greek Philosophy*, Vol.V (1987), p.227.

(42) P. Cuissin, 'The Stoicism of the New Academy' *The Skeptical Tradition*, ed. M. Burnyeat (1983), p.51.

(43) M. Burnyeat, 'Carneades Was No Probabilist' (unpublished but widely circulated) p.32 (of its typescript).

(44) A. A. Long & D. Sedley, *The Hellenistic Philosophers* Vol.1 (1987), pp.459-460.

(45) G. Striker, 'Skeptical Strategies', *Doubt and Dogmatism*, edd. M.Schofield, M.Burnyeat & J.Barnes (1980), pp.83-84.

(46) D.Sedley,'The Motivation of Greek Skepticism', *The Skeptical Tradition* (1983), p.18.

(47) キケロ『国家論』三、八。

(48) Long & Sedley, ibid. p.460.

(49) CA、二、六七。

(50) R.Bett, ibid. p.78. CA、二、一三九参照。

(51) CA、二、一〇三—一〇四。

(52) SEAM、七、一八四。

(53) 同、七、一六六。

(54) 同、七、一五九。

(55) DL、九、七六。SEPH、一、二〇六。

(56) プルタルコス『コロテス論駁』一一二二B。

(やまぐち よしひさ・西洋哲学史助教授)